

久木原遺跡

福岡県上陽町大字久木原所在遺跡の調査

上陽町文化財調査報告書 第1集



久木原遺跡遠景

2000

上陽町教育委員会



序

久木原遺跡は、県営中山間地域総合整備（陽源郷地区）久木原地区のは場整備事業に伴い、平成10年度に埋蔵文化財の調査を行ったものであります。

久木原遺跡からは、縄文時代の堅穴遺構や土器片、石器類及び中世の青磁の焼き物の破片などが発見されました。調査面積は僅かでありましたが、上陽町において発掘調査で初めて確認された様々な遺構・遺物により久木原地区の集落の歴史を探る貴重な手掛かりが得られました。

本報告書が、今後の文化財保護思想普及の一助として、学術資料として、また、本町の郷土資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご鞭撻いただきました南筑後教育事務所の小田主任をはじめ諸先生方に感謝申し上げますとともに、厳しい寒さの中で発掘調査に従事されました方々に厚くお礼申し上げる次第であります。

平成12年3月31日

上陽町教育委員会
教育長 原口 俊文

例 言

1. 本書は園場整備事業に伴い、平成10年度に発掘調査を実施した久木原遺跡の報告書である。
2. 遺構の実測は田辺げん・小田により、出土遺物の実測は永見秀徳・小田による。
3. 本書掲載の写真は遺構を小田が撮影し、遺物は永見が撮影した。
4. 挿図で使用した方位はすべて磁北である。
5. 本書掲載の地図は、平成3年国土地理院発行の黒木・草野1/25,000を使用した。
6. 本書の製図・執筆は永見・小田により、編集は小田が行った。

本文目次

- I 調査組織と調査経過
- II 遺跡の位置と歴史的環境
- III 検出遺構
 - (1) 堅 穴
 - (2) 集 石
 - (3) 土 坑
 - (4) 溝状遺構
 - (5) 段落ち
- IV 出土遺物
 - (1) 縄文時代の遺物
 - (2) 室町時代以降の遺物
- V まとめ

図版目次

- 図版1 (1)遺跡全景 (2)遺跡全景
- 図版2 (1)1号堅穴 (2)2号堅穴 (3)3号堅穴 (4)4号堅穴
- 図版3 (1)1号集石 (2)7・8号土坑 (3)9・10号土坑 (4)段落ち
- 図版4 堅穴出土縄文土器
- 図版5 土坑出土縄文土器
- 図版6 (1)堅穴・土坑出土石器・陶磁器・銅製品
 - (2)堅穴・土坑他出土石器・陶磁器・銅製品

挿図目次

- 第1図 遺構配置図(1/200)
- 第2図 堅穴実測図①(1/60)
- 第3図 堅穴実測図②(1/60)
- 第4図 1号集石実測図(1/30)
- 第5図 土坑実測図(1/40)
- 第6図 堅穴出土縄文土器実測図(1/3)
- 第7図 土坑他出土縄文土器実測図(1/3)
- 第8図 石器・陶磁器・銅製品実測図(1/3、1~12は2/3)

I 調査組織と調査経過

1. 調査に至る経過

平成9年度に上陽町久木原地区において県営の中山間地域総合整備事業（事業面積6.5ha）が計画され、平成10年度に事業が実施される運びとなった。上陽町教育委員会には文化財専門職員がいないため、上陽町教育委員会から南筑後教育事務所に試掘の依頼がなされた。試掘調査は平成10年10月27～29日の3日間で実施した。その結果、大字久木原1895・1番地他の12箇所において竪穴・土坑などの遺構及び縄文土器・土師器・石斧・砥石などの遺物が検出された。

これを受けて、11月10日に担当部局である筑後農林事務所・町経済課・町教育委員会・教育事務所との四者で協議を行った。その結果、遺構が確認された幹線道路（長さ約40m・幅2m）部分のみ本調査を行い、他の遺構が確認された箇所については盛土保存を行うとの取り決めが交わされた。

発掘調査は、調査担当の小田が八女市津江八升町遺跡を調査中であったので、津江八升町遺跡の調査終了後に取りかかることとなり、平成11年1月18日から開始した。期間中、吹雪に見舞われたが、1月29日に全体写真を撮影し、2月2日に遺構実測・遺物取り上げを終え、調査を完了した。

調査面積は約360㎡と僅かなものであったが、縄文晩期の竪穴・土坑・集石遺構が検出され、石器類（石鏃・石斧など）・縄文土器の他に青磁碗・砥石・鉄滓などの遺物が出土した。（小田）

2. 調査組織

平成10年度の発掘調査関係者は、以下のとおりである。

	福岡県筑後農林事務所	所 長	梅谷 威	
		農地整備課長	後藤 貞昭	
		県営第二係長	高井 旭	
		同 係	小牧 慶一	
		〃	東 幸太郎	
	上陽町役場経済課	経済課長	柴尾 宏	
		農政係長	井上 勝彦	
		同 係	石橋 武	
総 括	上陽町教育委員会	教育長	原口 俊文	
		社会教育課長	西木 清行	
事務担当		同 係長	久木原 章次	
		同 係	樋口 久美子	
		〃	中島 貴揮	
調査担当	福岡県教育庁南筑後教育事務所	生涯学習課技術主査	小田 和利	
〔発掘作業員〕				
石井 勇	井上カツエ	野田ツギエ	中島美智子	中村睦美
山下智恵美	田辺げん			原 富子

II 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡の位置

久木原遺跡は福岡県八女郡上陽町大字久木原1861番地他に所在する。上陽町は福岡県の南部に位置し、久留米市・浮羽郡と八女市・八女郡とは耳納山脈を隔ててその背面にあたる。町域の北縁は耳納山脈の稜線を境とし、東縁は星野村と接し、西縁は広川町と接し、南縁は黒木町と接する。人口は約4,400人で、面積59.32km²の大半を山林が占めるため林業を基幹産業とし、清流星野川に架かる重厚な石橋群とホテルが飛び交う風光明媚な町である。

歴史的環境

星野川は八女山地の石割岳（標高941.5m）に源を発する矢部川最大の支流で、水源から矢部川との合流点まで28.5kmに渡って西流し、流域には谷底平野が発達している。久木原遺跡は星野川によって開析された狭隘な谷底平野（標高131.6m）に立地し、発掘調査以前は水田であった。

上陽町・星野村は山間地という地理的要因から大規模な開発が殆どなされておらず、そのために上陽町においては遺跡の発掘調査がこれまで皆無であった。しかし、今回の久木原遺跡の発掘調査により縄文時代遺跡の存在が明らかとなり、星野村から上陽町にかけての星野川流域における縄文時代集落の様相が臆気ながらみえてきた感がある。

光延遺跡（星野村光延）⁽¹⁾は、久木原遺跡の約1.2km上流の星野川右岸に位置し、縄文土器・石鏃が出土している。岩野遺跡（星野村土穴）⁽²⁾は、光延遺跡の約1.6km上流の星野川右岸に位置し、蛇文岩製の磨製石斧が出土している。縫尾遺跡（星野村縫尾）⁽³⁾は、光延遺跡対岸の星野川左岸に位置し、弥生時代の土器が出土したとされる。一本遺跡（星野村轟）⁽⁴⁾は、岩野遺跡の約2.5km上流の星野川右岸に位置し、製茶工場造成に伴い平成9年度に発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代早期の炉跡・土坑などが調査され、押型文土器・石鏃・三稜尖頭器などが出土した。また、久木原遺跡から約700m下流の星野川右岸の上陽町栗林地区では縄文土器・黒曜石などが採集されており、当該期遺跡の存在が予測される。⁽⁵⁾

この様に、星野村十龍から上陽町中村にかけての星野川流域の谷底平野は、幅約200～300m程度の狭隘な平野ではあるが、縄文期の遺跡が多数存在しており、縄文時代においては水・食糧の確保が割と容易で、住むのに好適地であったと言える。（小田）

〔遺跡地図遺跡名〕

凡例 ●：縄文・弥生時代遺跡、■：館跡、▲：城跡、□：墓所跡、△：石橋、○：村指定天然記念物

- | | | | | | | |
|---------|---------|----------------|--------------|-----------|--------|---------|
| 1 久木原遺跡 | 2 縄文散布地 | 3 光延遺跡 | 4 縫尾遺跡 | 5 岩野遺跡 | 6 一本遺跡 | 7 大草平遺跡 |
| 8 星野氏館跡 | 9 妙見城跡 | 10 高牟礼城跡 | 11 星野氏墓所 | 12 懐良親王墓所 | 13 栗林橋 | 14 八重谷橋 |
| 15 三川橋 | 16 飯塚橋 | 17 高樹神社のキンモクセイ | 18 内宮のオオイチョウ | 19 小野のケヤキ | | |

註1～3 木下修編 大草平（星野村文化財調査報告書第1集） 1983 星野村教育委員会

註4 平成9年度に星野村教育委員会が発掘調査を実施した。

註5 上陽町文化財専門委員木下義弘氏の御教示による。

Ⅲ 検出遺構

(1) 竪 穴

1号竪 穴 (図版2-1、第2図)

調査区の南側で検出した。南半部は削平により遺存しないが、長軸7.0m、幅4.0m程の長円形を呈しよう。竪穴内部にビットはなく、4・5号土坑が掘り込まれている。

2号竪 穴 (図版2-2、第2図)

1号竪穴のすぐ西側で検出した。南半部は削平により遺存しないが、長円形を呈しよう。東西幅は5.0mで、北壁寄りにビットが1個ある。石鏃・青磁碗が出土した。

3号竪 穴 (図版2-3、第3図)

2号竪穴の2m西側で検出した。3.9m×3.9mの隅丸方形を呈し、中央に不整形の土坑が穿たれている。土坑の北側には川原石が入ったビットがある。石鏃が出土した。

4号竪 穴 (図版2-4、第2図)

3号竪穴の1.5m西側で検出した。長軸2.93m、短軸1.80mの楕円形を呈し、深さは10cmと削平が著しい。

5号竪 穴 (第2図)

調査区の西側で、4号竪穴の3.5m西側で検出した。不整方形を呈し、東西幅2.75mで、北壁が調査区外にあるため長軸は不詳。竪穴内部にビットはない。石鏃が出土した。

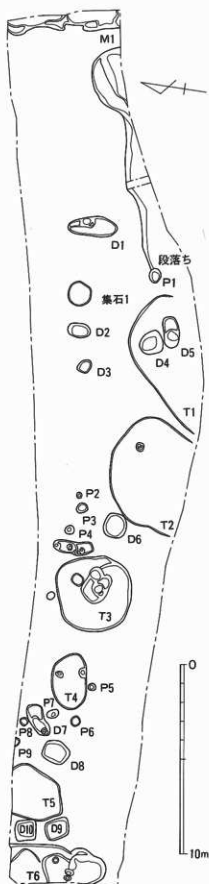
6号竪 穴 (第3図)

調査区の西端部で検出した。検出長5.1m、幅2.1mで、竪穴としたが、土坑が3基連続した形状を呈し、南側に行くに従い深くなっている。石鏃が出土している。

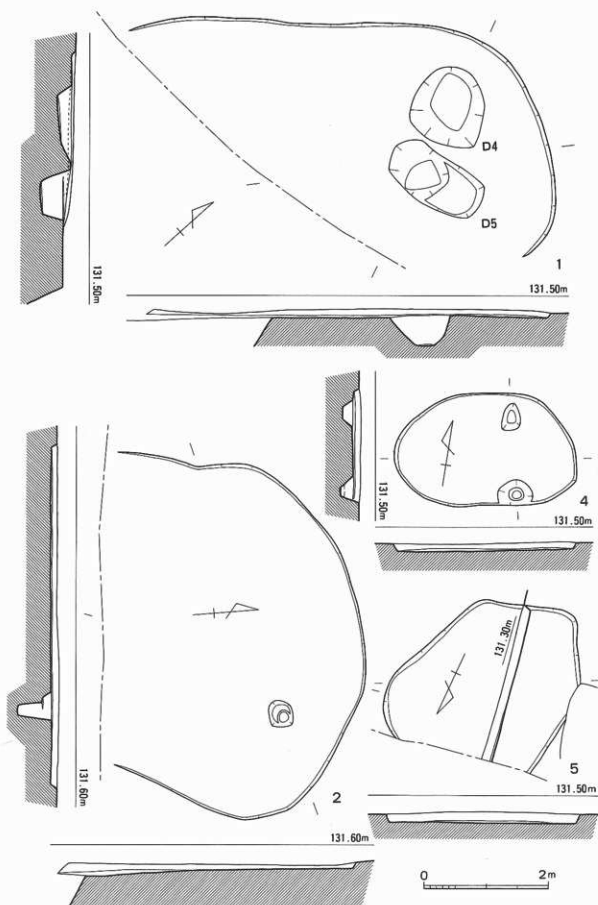
(2) 集 石

1号集 石 (図版3-1、第4図)

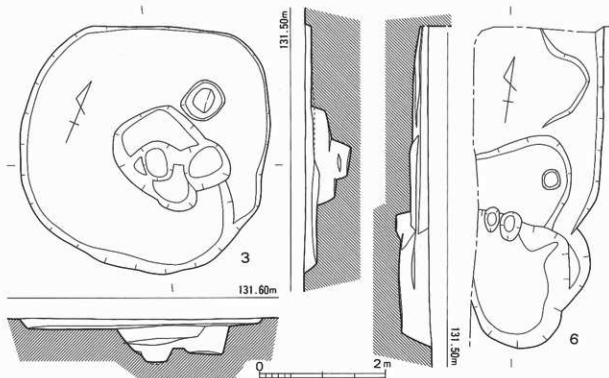
1・2号土坑の中間で検出した。径1.25mの円形を呈し、底面には扁平な雲母片岩が9個敷かれており、片岩は火熱



第1図 遺構配置図 (1/200)



第2図 堅穴実測図① (1/60)



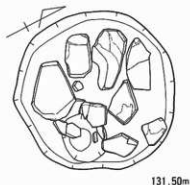
第3図 竪穴実測図② (1/60)

により黒変していた。また、東側にはビットがあるが、敷石を壊しており、後に掘り込まれたもの。

(3) 土 坑

1号土 坑 (第5図)

調査区の東側で検出した。長軸2.57m、短軸1.03mを測る楕円形を呈し、深さは削平により9cmと浅い。北東壁側にはビットが掘り込まれている。



2号土 坑 (第5図)

1号集石の1m西側で検出した。長軸1.19m、短軸0.72mを測る楕円形を呈し、深さは17cmの遺存状態であった。



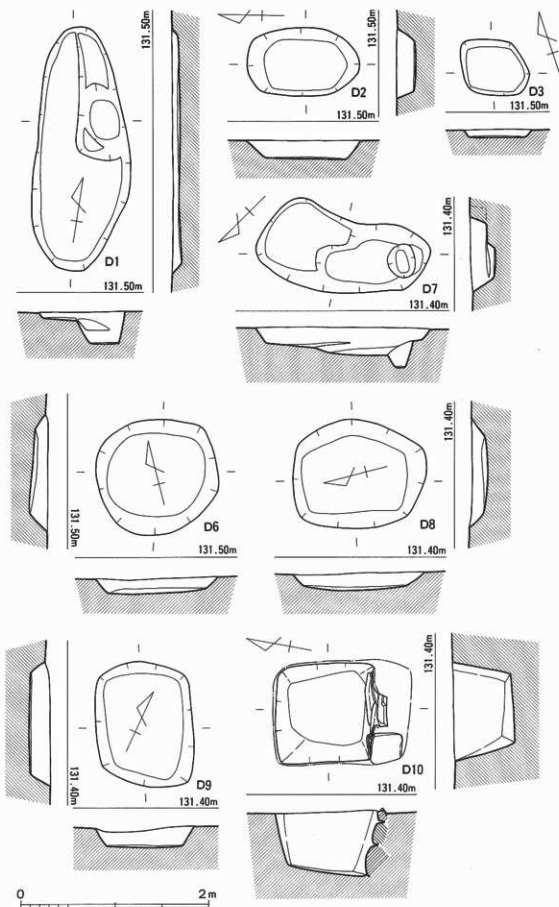
第4図 1号集石実測図 (1/30)

3号土 坑 (第5図)

2号土坑の1.2m西側で検出した小型の土坑で、長軸0.7m、短軸0.57mで、深さは7cmと浅い。

4号土 坑 (第2図)

1号竪穴内で検出した。不整形形を呈し、長軸1.24m、短軸1.15mで、深さは0.17mを測る。縄文土器が出土しているが、当土坑に伴うものかは不明。



第5圖 土坑実測図 (1/40)

5号土 坑 (第2図)

当土坑も1号堅穴内で検出した。楕円形を呈し、長軸1.83m、短軸0.8mで、二段に掘り込まれている。埋土は締まりのない砂利混じりの褐色土で、埋土の状況からして新期のものと思われる。

6号土 坑 (第5図)

2号堅穴のすぐ西隣で検出した。平面形は円形を呈し、長軸1.28m、短軸1.22mで、深さは14cmの遺存状態である。

7号土 坑 (図版3-2、第5図)

4号堅穴の1m北西側で検出した。平面形は長円形を呈し、長軸1.85m、短軸0.84mで、二段に掘り込まれている。中央での深さは0.3mを測る。埋土中から石鏝が出土した。

8号土 坑 (図版3-2、第5図)

4号堅穴と5号堅穴の中間で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.42m、短軸1.16mで、深さは18cmの遺存状態である。

9号土 坑 (図版3-3、第5図)

5号堅穴と6号堅穴の中間で検出した。平面形は隅丸の不整長方形を呈し、長軸1.32m、短軸1.02mで、深さは0.22mを測る。埋土中から石鏝が出土している。

10号土 坑 (図版3-3、第5図)

9号土坑のすぐ北側に位置し、5号堅穴を僅かに切っている。長軸1.08m、短軸1.04mの方形を呈し、逆台形に掘削され、深さは0.63mを測る。南壁には川原石が三段に積まれ、壁面全体は黄褐色の砂質土で目張りされていた。構造的に家屋の縁の下に設けられた貯蔵穴と考えられ、簀・煙管・半銭など近代の遺物が出土している。

(4) 溝状遺構

1号溝

調査区の東端部で検出した南北に走る溝で、長さ6m分を調査した。溝底は南側に行くに従い深くなり、埋土中から青磁碗が出土した。

(5) 段落ち

1号段落ち (図版3-4)

調査区の南東部で検出した。東側は二段に掘り込まれ、縄文土器・石鏝が出土したものの埋土は褐色土で、時期的に新しい印象を受ける。

(小田)

IV 出土遺物

今回の調査では、バンコンテナー2箱分の遺物が出土した。縄文土器と刻目突帯文土器が多数を占め、他に石器・陶磁器・銅製品などがある。

(1) 縄文時代の遺物

1号竪穴出土遺物（図版4・6-1、第6・8図）

土器（1～3） 1は縄文土器の浅鉢である。口縁部の細片であるが、螺リボン状の突起を有する。内外面ともミガキを施しており、精製土器の範疇に入る。2は刻目突帯文土器の甕である。内傾する口縁部の破片であるが、内面はミガキを施している。3は縄文土器の底部で、底径は6.6cmを測る。深鉢になると思われるが、器面の風化が著しく調整は不明。

石器（2） 黒曜石製の三角鎌で、長さ2.05cm、基部幅1.35cm、重さ0.5gを測る。

2号竪穴出土遺物（図版4・5・6-1・6-2、第6・8図）

土器（4～9・40・41） 4は外開きの口縁部破片で、外面ナデ、内面ミガキによる。5は直立する口縁部の破片で、全体的にナデ調整によるが、内面はミガキを施している。6は口縁部が小さく外反する器形で、体部内面の一部に条痕を留める。胎土は粗く、焼成もやや不良である。7は体部の細片で、内面ナデ調整、外面には条痕を留める。8・9は直立気味の口縁部細片で、8の体部は内外面とも条痕を留める。9の内面調整は不明であるが、外面はヨコナデによる。40は口縁部の細片で、全面にミガキを施している。41は直立気味の口縁部細片で、全面ナデ調整のようである。

石器（3・13） 3はサヌカイト製の三角鎌で、長さ2.45cm、基部幅1.4cm、重さ0.75gを測る。13は扁平打製石斧で、長さ10.5cm、幅6.6cm、厚さ1.4cm、重さ99.3gを測る。石材は緑泥片岩。

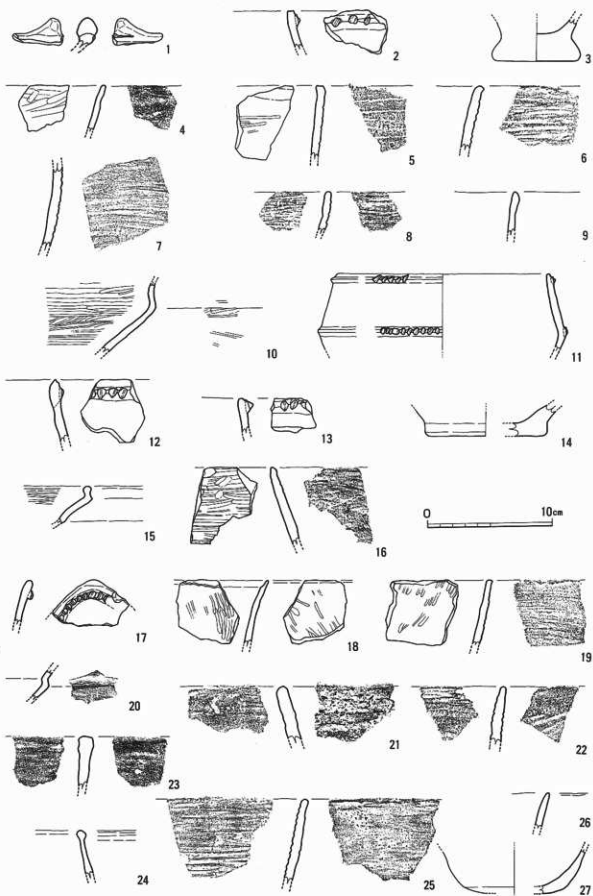
3号竪穴出土遺物（図版4・6-1、第6・8図）

土器（10～14） 10は縄文土器の浅鉢で、屈曲する体部をもつ。器面が丁寧に磨かれた精製品である。11～13は刻目突帯文土器の甕である。11は復原口径17.0cmを測る。体部は「く」字形に屈曲し、口唇部直下と体部の屈曲部に1条の刻目突帯を有する。12・13は内傾する口縁部の破片で、12の胎土は粗く焼成も不良であるが、13の胎土は密で焼成も良好である。14は縄文土器の深鉢底部と思われ、復原底径9.3cmを測る。ナデ調整により、胎土は粗く焼成もやや不良である。

石器（4） 黒曜石製の三角鎌で、長さ2.4cm、基部幅2.1cm、重さ2.0gと他のものに比してやや大振りである。

4号竪穴出土遺物（図版4、第6図）

土器（15・16） 15は浅鉢の口縁部破片で、端部を外反させている。内外面ともミガキを施した精製品である。16は深鉢で、口縁部に条痕が残る。



第6圖 堅穴出土縄文土器実測図 (1/3)

5号壺穴出土遺物 (図版4・6-1、第6・8図)

土器 (17~19) 17は刻目突帯文土器で、浅鉢になろう。4箇所に山形突起が付くタイプと思われ、口縁部に沿って刻目突帯を貼付している。18・19は縄文土器の深鉢で、18は外反する口縁部の細片で、口唇部内面には段を有する。体部は内外面ともミガキを施している。19の外面には条痕が認められるが、内面はミガキを施している。

石器 (5~7) 5はチャート製の三角鏃で、長さ2.65cm、基部幅1.6cm、重さ1.4gを測る。6は黒曜石製の剥片鏃で、基部を欠損する。7は黒曜石製の三角鏃で、先端部を欠く。基部幅は1.25cm。

6号壺穴出土遺物 (図版4・6-1、第6・8図)

土器 (20~27) 20は精製の浅鉢の口縁部破片である。内外面ともミガキを施しており、胎土は精良である。21~26は深鉢と考えている。21は胎土が粗く、砂粒を含む。口縁部が内傾する粗製土器になるか。22は口縁部が直立する深鉢の細片で、口縁部はナデ調整によるが、体部内外面は条痕を留める。23は口唇部を肥厚させたもので、口縁部は直立する。24は内傾する口縁部の破片で、深鉢になると思われるが確信はない。25は直立気味の口縁部破片で、体部の内外面に条痕を留める。26は僅かに外反する口縁部の細片である。器面調整は不明であるが、粗製土器と思われる。27は鉢の底部破片で、復原底径は8.2cmを測る。外面はナデで、内面はケズリを施す。

石器 (8・9) 8・9は黒曜石製の三角鏃で、8は先端部を、9は先端部と基部側縁を欠く。

1号集石出土遺物 (図版5、第7図)

土器 (38) 38は深鉢の口縁部細片で、外側に屈曲する。器面調整はヘラミガキであろう。

4号土坑出土遺物 (図版5、第7図)

土器 (28) 28は浅鉢の体部細片で、内外面ともヨコナデを施している。胎土は密で、焼成も良好である。

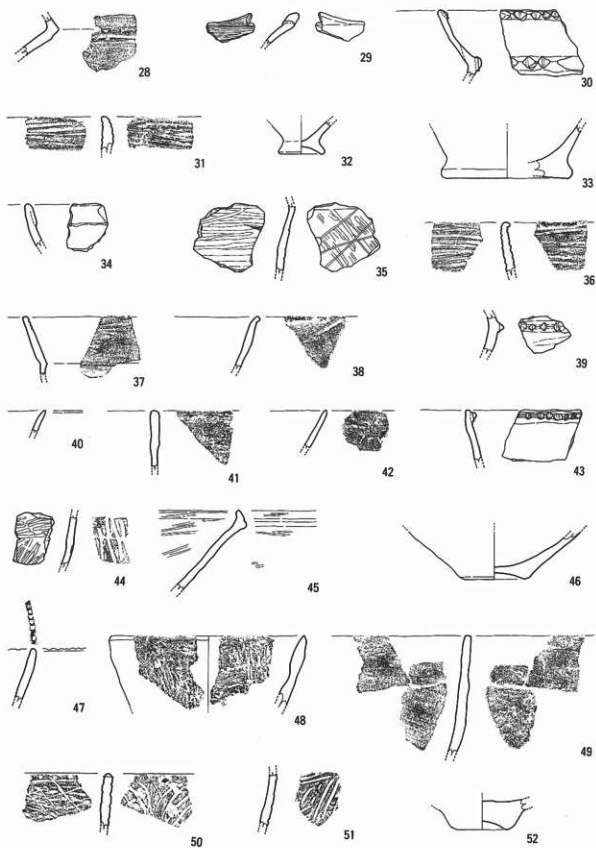
7号土坑出土遺物 (図版5・6-1、第7・8図)

土器 (29~33) 29は縄文土器の浅鉢である。外方に大きく開く口縁部の破片で、口唇部に線リボン状の突起を有する。全面にミガキが施され、胎土も精良である。30は刻目突帯文土器の腹である。内傾して緩やかに外反する口縁部細片で、口唇部直下と体部屈曲位に1条の刻目突帯を有する。31は僅かに内湾する深鉢の口縁部細片で、全面に条痕を留める。32は浅鉢の底部で、復原底径は3.3cmを測り、底部は中空の台状を呈する。33は深鉢の底部破片で、復原底径は10.5cmを測る。外面はヨコナデ、内面はナデ調整による。

石器 (10) 10は側縁の全周に割離を施したもので、中央部は横み状に高くなっている。形状からして円形盛器になるか。長さ2.95cm、幅2.0cm、重さ2.95gを測る。石材はサヌカイト。

8号土坑出土遺物 (図版5、第7図)

土器 (34) 34は縄文土器の深鉢で、口縁部は内傾し、口唇部は外側に折り返して肥厚させている。胎土は密であるが、焼成は不良。なお、器面調整は磨減により不明。



0 10cm

第7圖 土坑他出土繩文土器実測図 (1/3)

9号土坑出土遺物 (図版5・6-1、第7・8図)

土 器 (35・36) 35・36は縄文土器の深鉢。35は体部の細片で、屈曲部下に3条の斜交する沈線を施す。胎土は密で、内外面ともミガキを施している。36は内傾する口縁部細片で、体部内外面に条痕を留める。胎土は密で、焼成は良好である。

石 器 (11) 11は黒曜石製の三角鏃で、長さ2.05cm、基部幅1.7cm、重さ1.1gを測る。

10号土坑出土遺物 (図版6-1、第8図)

石 器 (12) 12は縦長剥片使用の石錐であるが、先端部を欠損する。石材は黒曜石。

1号段落ち出土遺物 (図版5、第7図)

土 器 (42) 42は縄文土器の鉢で、口縁部は小さく外反する。器面調整は不明であるが、胎土に砂粒を多く含むものの焼成は良好である。

ビット他出土遺物 (図版5・6-1、第7・8図)

土 器 (43) 43は刻目突帯文の甕で、口縁部は内傾する。口唇部直下に1条の刻目突帯を巡らす。内外面ともヨコナデ調整を施し、焼成も良好である。

石 器 (1) 1は調査区東端部での遺構検出時に出土した黒曜石製の三角鏃で、縦長剥片を素材とする。長さ1.45cm、基部幅1.25cm、重さ0.65gを測る。

試掘調査出土遺物 (図版5・6-2、第7・8図)

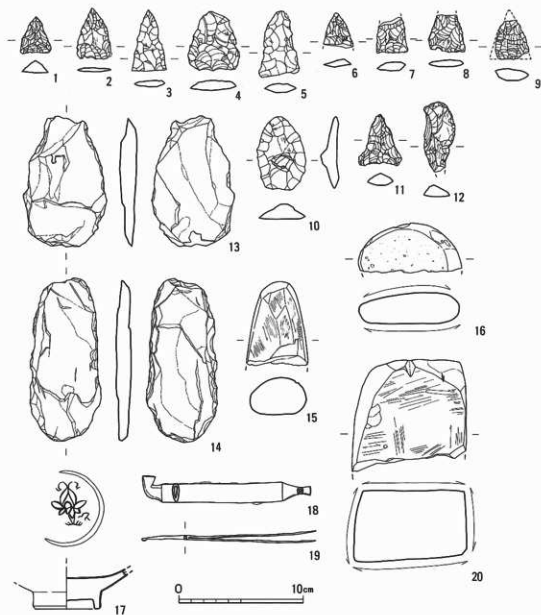
土 器 (44~52) 44は体部の細片で、外面はナデ、内面にミガキを施す。外面に沈線を1条施す。45は浅鉢の口縁部細片で、全面にミガキを施している。また、口縁部直下に沈線を1条有する。46は浅鉢の底部で、外面にミガキを施している。胎土はやや粗く、砂粒を含んでいる。47は鉢の口縁部であろう。口縁端部に刻目を施す。48は鉢の口縁部破片で、復原口径15.5cmを測る。口縁部ナデ、体部は内外面ともケズリを施す。49・50は口縁部が直立する深鉢で、49は内面にケズリがみられる。50はナデ調整による。50は体部内外面に条痕を留める。51も深鉢の体部細片で、外面に条痕を留める。52は底部破片で、復原底径3.8cmを測る。底部は上げ底状を呈する。

石 器 (14~16) 14はNa16トレンチ出土の扁平打製石斧で、短冊形を呈する。片岩製で、長さ13.1cm、幅5.7cm、厚さ1.2cm、重さ137.2gを測る。15は安山岩製の磨製石斧で、刃部を欠く。表面は火熱を受けて黒っぽくなっている。16は円礫を用いたすり石で、側縁には敲打痕がみられる。厚さは2.5cmを測る。15・16ともNa5トレンチの出土。

(2) 室町時代以降の遺物

10号土坑出土遺物 (図版6-2、第8図)

銅製品 (18・19) 18は煙管の完形品で、長さ13.5cm、幅1.6cm。雁首と吸口には銅板を使用しているが、ラウ部分には木材を鉄板で巻いて製作している。底面に密着して出土した。19は銅製の簪で、長さ14.0cm。先端部は耳搔きとなっており、そこから3.7cmの部位で二股に分かれている。



第8図 石器・陶磁器・銅製品実測図 (1/3、1~12は2/3)

1号溝出土遺物 (図版6-2、第8図)

陶磁器 (17) 17は龍泉窯系青磁碗の底部破片で、底部の器肉は厚い。復元高台径は5.4cmを測る。見込みに草花文を施している。

試掘調査出土遺物 (図版6-2、第8図)

石器 (20) 20は硬砂岩製の砥石で、4面を砥面としている。表面は火熱により黒化している。残存長9.0cm、幅9.1cm、厚さ5.7cmを測る。No.20トレンチの出土。(永見・小田)

V ま と め

今回実施した久木原遺跡の発掘調査は、調査面積が約360㎡と僅かなものであったが、上陽町において初めての本格的な調査で、主として縄文時代晩期の竪穴・土坑・集石遺構を検出し、パンコンテナー2箱分の土器・石器が出土した。ここでは、出土土器についてふれ、若干の考察としたい。

今回の調査で出土した土器には、縄文土器と刻目突帯文土器があり、総体としては縄文時代晩期後半～晩期末に位置づけられる一群である。まず、両者のうち、より新しい要素をもつと考えられている刻目突帯文土器の様相を概観する。刻目突帯文土器は、1・3・5号竪穴、7・9号土坑等から出土している。器種的には5号竪穴の浅鉢を除いて、すべて甕であり、壺が含まれない点が注目される。また、5号竪穴出土の浅鉢は平面形が方形を呈するもので、器面の調整は丁寧である。

縄文土器はほぼすべての遺構から出土していて、浅鉢・深鉢・鉢がある。また、精製品と粗製品に加えて、半精製品と思われるものも出土しているが、浅鉢では精製品の比率が高い。深鉢では器面に貝殻条痕を残す粗製のものが多く認められる。

以上の土器組成を見てみると、今回の調査で出土した土器群は刻目突帯文土器のうち、古段階に見られる組み合わせにほぼ合致する。特に、「山ノ寺式土器」の標識遺跡として著名な山ノ寺縄木遺跡の様相に近いものがある。ただ大きな相違点は、壺の欠落と山ノ寺縄木遺跡に見られる組織痕土器が当遺跡では見られないことである。前者については、刻目突帯文期の前半は比較的壺の個体数が少なく、後半期に入って増加するので、基本的な傾向から大きく外れるものではないと認識したい。後者については、当遺跡の立地が組織痕土器の分布圏外である豊前・豊後に比較的近いことも関係しているかも知れない。組織痕土器は半精製の浅鉢を基本器形とするため、浅鉢の出土割合にも影響している。また、刻目突帯文期にしては粗製深鉢の割合が多い点もよく合致する。刻目突帯文期にあって、縄文的文化様相が割合強いとも云える。さらに土器以外では、扁平打製石斧の出土も注目される。これは一般に土掘り具と考えられているものであるが、縄文晩期にはよく見られるものである。畑の耕作に用いたと考えるのが妥当で、畑作中心の農耕が行われていたことがうかがわれる。

周知のとおり、山ノ寺縄木遺跡は雲仙の東斜面に位置し、遺構面は礫まじりである。当遺跡も同様の遺構面で、斜度は異なるものの山間に位置する点も良く似ている。土器の組成からも、似通った生活様式が考えられよう。文化様相としては刻目突帯文土器の前半期、すなわち山ノ寺式期のものと考えて大過ないと思われるが、豊前・豊後地方の影響や中間山地に展開するという立地上の特色があることも見逃せない。そういった意味で、刻目突帯文期の地域的特色や立地別の展開に関し、て再考する資料の一つになりうるであろう。

なお、星野村十籬から上陽町中村にかけての星野川上流域の谷底平野には、一本遺跡・岩野遺跡・光延遺跡・縫尾遺跡・久木原遺跡・栗林遺物散布地などの縄文時代の遺跡が多数分布しており、今後、当地域において本格的な発掘調査がなされ、当該期の資料増加を期待したい。(永見・小田)



(1) 遺跡全景 (東から)



(2) 遺跡全景 (西から)

1



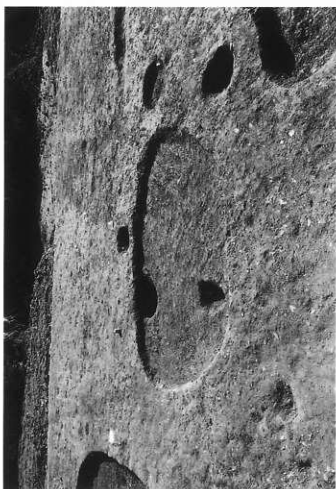
2



3



4



(1) 1号竪穴 (北から)

(2) 2号竪穴 (北から)

(3) 3号竪穴 (北から)

(4) 4号竪穴 (北から)

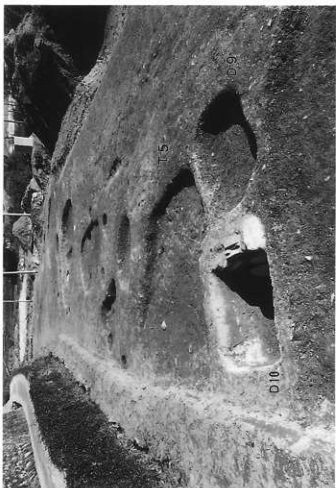
1



2



3



4

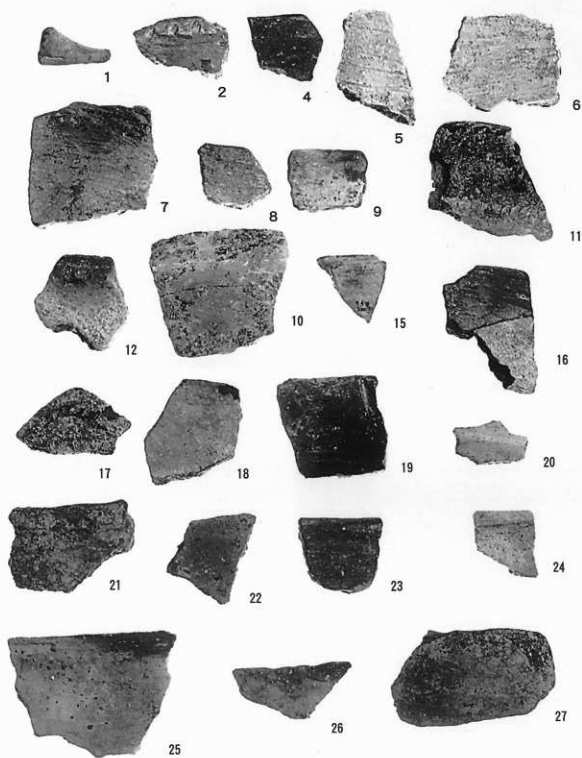


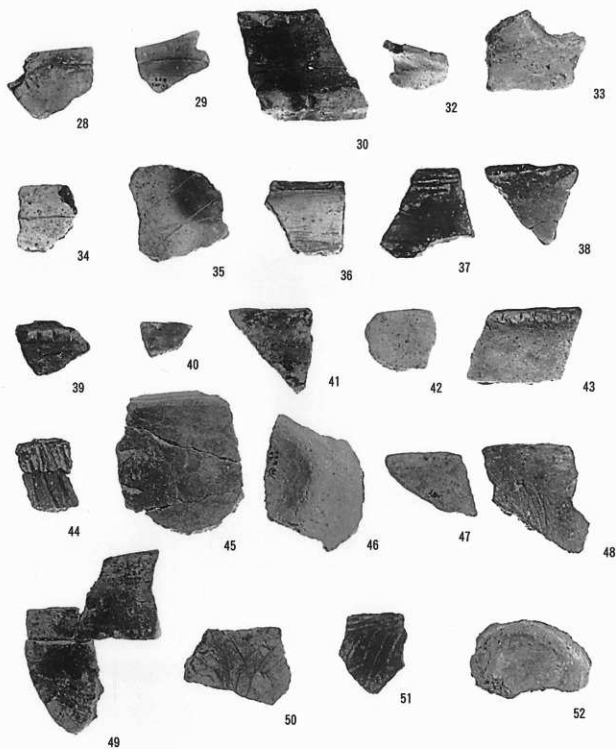
(1) 1号集石 (東から)

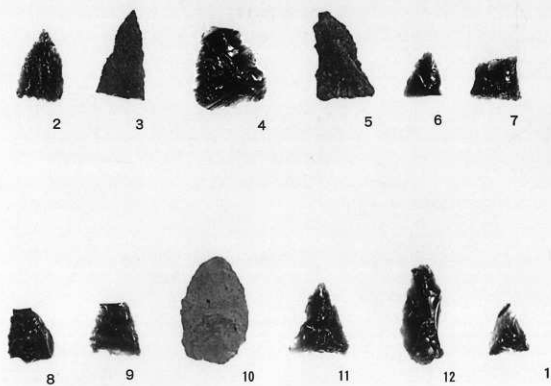
(2) 7・8号土坑 (北から)

(3) 9・10号土坑 (西から)

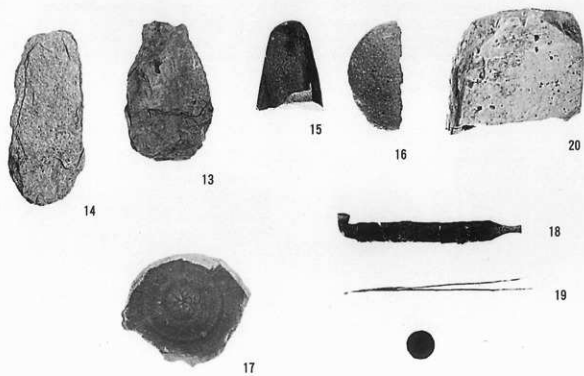
(4) 段落ち (西から)







(1) 豎穴・土坑出土石鐵他



(2) 豎穴・土坑他出土石器・陶磁器・銅製品

報告書抄録

ふりがな	くぎはらいせき					
書名	久木原遺跡					
シリーズ名	上陽町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第1集					
編著者名	小田和利・永見秀徳					
編集機関	上陽町教育委員会					
所在地	〒834-1102 福岡県八女郡上陽町大字北川内483-1					
発行年月日	平成12年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くぎはらいせき 久木原遺跡	福岡県八女郡 上陽町大字 久木原1861番地	33° 15'	130° 41' 30"	990118 ～ 990202	約360㎡	圃場整備
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
久木原遺跡	集落	縄文 室町	竪穴 6基 土坑 10基 集石 1基 溝 1条	縄文土器・石器 " " 青磁碗	標高130m の谷底平野 に立地	

久木原遺跡

上陽町文化財調査報告書 第1集

平成12年3月31日

発行 上陽町教育委員会

福岡県八女郡上陽町大字北川内483-1

印刷 株式会社 西日本新聞印刷

福岡市博多区吉塚8-2-15

